

コープあいち 気仙地区で、3年目となる七夕まつり支援

●「願いごとふうせん」が大空を舞う

コープあいちは、組合員の参加者を募り、2013年8月5日～8日にかけて、「夏祭り交流 with 三陸気仙」のバスボランティアを行ないました。5日19時、コープあいちの組合員が乗ったバスは名古屋駅を出発、合計21人で岩手県気仙地区へ向けて出発しました。車中泊で、翌日6日朝に岩手県に到着。最初に、陸前高田市に向かい、震災慰霊碑でお参りをしました。

一行は昼食を済ませた後、8月6日、7日と開催される、大船渡市の「盛町灯ろう七夕まつり」の支援のために、大船渡市のスーパー「サン・リア・ショッピングセンター」に移動しました。ここで愛知県安城市の安城七夕まつり協賛会のメンバーと合流し、「願いごとふうせん」のお手伝いを実施。「願いごとふうせん」は、安城市の七夕まつりで行なわれている恒例のイベントで、風船に願いを書いて空に飛ばすというものです。コープあいちの組合員は、道ゆく人に声をかけて、風船に願いを書き込んでもらいました。復興や健康への願いが多く見られました。天候はあいにくの雨でしたが、「願いごとふうせん」を飛ばす18時には雨は止み、大空にたくさんの願いを乗せた風船が舞いました。その直後、空には虹がかかり、色とりどりに舞う風船に彩りを添えました。

また、「盛町灯ろう七夕まつり」に、コープあいちは出店、2日間でジャンボ焼き鳥700本、だんご500本を完売させ、売り上げの一部は実行委員会に寄付されました。盛町夏まつり実行員会に参加して3年目の夏を迎え、このお祭りにもすっかり馴染んできました。

●丘の上の高寿園まで山車を引っ張る

翌日8月7日は、陸前高田市へ移動、「うごく七夕まつり」の支援に向かいました。コープあいちが2年間支援をしてきた荒町まつり組の安全祈願祭に参加、組合員の代表である田中和範さんが献花の大役を務めました。荒町祭り組会長の金野彰さんは、「いまわしい震災から3年の月日が流れました。津波で亡くなった方々の想いを背中に背負いながら、今年も山車の制作に取り組み、今年はずざま支援を受けて、ようやく元の大きさの山車をつくることができました。昨年より倍以上の手間暇がかかりましたが、仕事をやりくりしたり、70代、80代の方々が献身的に取り組んでくれました。さらに、コープあいちさんには、7月下旬、20数名の方におこしいただき、花飾りを作っていただきました。さまざまな人のつながりで、今年も実現することができました。まだ復興の先行きは見えません。祭りが終われば、ここは何もない更地が広がるだけの場所に戻ります。しかし、今日はこの町に一時、七夕の花を咲かせ、心行くまで楽しみましょう」とあいさつしました。



「願いごとふうせん」の取り組み。道行人に声をかけ、風船に願いを書いてもらった。



「願いごとふうせん」を、一斉に大空へ飛ばした。

午前中、コープあいちの組合員は、荒町の山車を引っ張り、何もなくなった更地の町を練り歩きました。建物のない荒野に12台の山車が練り歩き、3年目にしようやく、すべての山車がそろいました。お昼は、現地婦人会が作ったカレーライスです。ボランティアで参加していた大学生たちが、カレーを配る姿が印象的でした。

午後2時から、特別養護老人ホーム「高寿園」に向けて、ミニ山車が出発しました。この山車は、約1.6km離れた丘の上にある高寿園の利用者に、「うごく七夕まつり」を楽しんでもらうために作られたものです。今年は山車が大きくなるため、ミニ山車を作ることはできないかもしれないという意見がある中、やっぱり高寿園のみなさんに「うごく七夕まつり」を見せたいという思いから、みんなが一致団結して製作に取り組んだものです。高寿園では、お囃子（はやし）と盆踊りを披露しました。

コープあいちと親交の深い高寿園で栄養士を務める菅原由紀枝さんは、「皆さん、それぞれの生活があるのに、遠い愛知県から足を運んで、七夕まつりを盛り上げてくださり、本当に感激しております」と話してくれました。荒町の出身でもある菅原さんは、「荒町は、陸前高田の中でも、特にお祭りにお金をかけて、新しいこと取り組んできた町でした。昨年は、ミニ山車のみでの参加となり、みんな悔しい思いをいただいていたと思いますが、今年は本来の大きさに戻すことができ、みんな喜んでいてと思います。しかし、若い後継者を失ってしまった中で、お祭りの準備をすることは本当に大変だったでしょう。コープあいちさんの存在がなければ、ここまでことは出来ていないと思います」と語ってくれました。



荒町まつり組の山車の前で記念撮影。



夜になり、灯りが灯った、荒町まつり組の山車。

●復興が進むと同時に、町の面影が失われていく

陸前高田市から愛知県知多市に移住した鶴島道子さんも、「うごく七夕まつり」に訪れていました。震災以降3度目となる鎮魂の七夕まつりを迎え、鶴島さんは今の心境を次のように語ってくれました。

「愛知県知多市に引っ越して2年たちました。このお祭りを見ても分かりますが、陸前高田では、何かと近所付き合いがあります。知多市に引っ越した時は、近所付き合いがない気楽さを満喫していましたが、時間がたつにつれて、人と人の交流がないことに、寂しさを感じ始めました。両親は割り切っていて、知多に永住すると言っています。それでも、やはり陸前高田にくと、両親も友達と会うことができ、表情が生き生きとします。知多ではデイケアに通っていますが、こちらにいれば、その必要はないでしょう」

さらに、鶴島さんは、復興の先行きが見えない中、新たな決断をしたことを教えてくれました。

「いろいろと考えた末に、陸前高田市の仮設住宅に申し込みをしました。こちらには津波で亡くなった主人のお墓もありますし、土地の問題なども、ここにいないと分からないこともあります。ただ、愛知県でも愛知県被災者支援センターで、広域避難者の方々を支援する取り組みに参加しており、その活動も継続したいと思っています。今後のことはどうなるかまだ分かりませんが、しばらくは、知多と陸前高田を往復する生活になると思います」

現在、陸前高田市は、かさ上げの作業が急ピッチで進んでいます。おそらく、来年以降は、「うごく七夕まつり」は、同じコースを巡回することはできなくなるだろうと言われています。復興が進むと同時に、かつての町の面影が消え失せて行こうとしているのです。復興は進まなければ困るが、自分たちの町がなくなっていくことには寂しい、そんな複雑な思いを抱く人が多くいます。それゆえに、今年の「うごく七夕まつり」には、それぞれの参加者に、特別な思いが込められていたのかもしれない。

コープあいち一行は、翌日8日朝6時に大船渡市をバスで出発し、宮城県気仙沼市などを見学し、約14時間の愛知県までの帰路につきました。それぞれの組合員が、実に収穫の多い、七夕まつりの支援ツアーとなりました。